

## 1. 特に効果的であり改善に資した事例について

### A. コースワークの充実・強化

#### ⑥その他

##### 《理工農系》

#### ●奈良女子大学人間文化研究科物理科学専攻、複合現象科学専攻 「理系の実践型女性科学者育成」の事例

##### （具体的に何を実施したのか）

本授業は、三つの大学院 GP：九州大学大学院生物資源環境学府の「生物産業界を担うプロフェッショナル育成」、奈良女子大学人間文化研究科人社系「女性の高度な職業能力を開発する実践的教育」、理工農系「理系の実践型女性科学者育成」が共同で実施した。平成 21 年度は共同で明日香へのフィールドワークを行いその結果を学生自ら企画したシンポジウムで発表した。平成 22 年度は、奈良女子大学でのオープンキャンパスでの公開講座、福岡県、長崎県、熊本県の三つの高校での出前授業を行った。平成 23 年度は、理系のイメージアップのため、理系キャラ、android アプリ、iphone アプリを作成し本学と九大の双方の学園祭期間中にブースを設け発表した。

##### （実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと）

本学は奈良にあり九大は福岡という遠距離にある大学同士の共同プロジェクトということで、連絡方法、会議の仕方、旅行日程の設定等をとくに考慮した。

また、主に大学・分野の違いによる「常識」の差異には気を配った。

##### （どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか）

通常の大学院授業ではあまりない異なる分野、異なる大学の院生が自ら企画・運営を行うことで、実践力を培うことができた。学生の活動の結果もさることながら、そのプロセスで通常の授業ではできない経験ができた。他大学との交流により学生が新しい経験をしたことが他の学生に対しても波及効果を生んだ。

今回の遠距離他大学、他分野との共同授業は「組織的な大学院教育改革推進プログラム」があったこそではあるが、かかる交流は近隣の大学でやるなどのいろいろなバリエーションが考えられ、新たな授業モデルの端緒となることが期待できる。

## 1. 特に効果的であり改善に資した事例について

### D. 産業界、地域社会等多様な社会部門と連携した人材養成機能の強化

#### ③キャリアパス形成を支援するための体制整備や、社会的・職業的自立に向けた情報提供

##### 《理工農系》

#### ●奈良女子大学人間文化研究科物理科学専攻、複合現象科学専攻 「理系の実践型女性科学者育成」の事例

##### (具体的に何を実施したのか)

博士前期課程において「女性先端科学者セミナー」なる授業科目を開講した。これは女性の実務家、研究者等を招聘し講演してもらう。その中で、業務に関する話だけではなく自らの就業から現在に至るキャリアパスについて出産、育児、介護等の経験も含めて話をしてもらった。授業後には講師との懇談を設け学生への情報提供の場とした。また聴講報告書を提出させ学生が何を学んだかを自省させることとした。

##### (実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

講師には女性特有の体験と仕事との兼ね合い・両立の方法を関連させて話してもらうよう留意した。

キャリアパスの話は分野を問わず、あるいは博士前期、博士後期の別を問わないことが多いので、多様な学生が聴講できるよう講演内容に配慮してもらった。

##### (どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

女子学生の場合、就業後のキャリアパスに不安を抱く割合が高く、そのことが大学院への進学率にも影響していると考えられる。そのため実際のロールモデルを知ることができることは学生に大いにプラスとなるようである。そのことは学生アンケートと報告書の内容から判断される。

## 1. 特に効果的であり改善に資した事例について

### E. 学習・研究環境の改善

#### ②国内外の学会発表、実習等に対する経済的支援の充実

##### 《理工農系》

#### ●奈良女子大学人間文化研究科物理科学専攻、複合現象科学専攻 「理系の実践型女性科学者育成」の事例

(具体的に何を実施したのか)

国内外の学会発表、実習について交通費の実費、宿泊費の実費を補助した。

派遣前に申請書を提出させ審査し、口頭発表すること、発表することが学生の研究の進展に有意義であることを条件に派遣した。

また、国内外への実習も実施した。件数は少ないものの学生にとっては特に国外での実習は有益であった。

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

派遣前には申請書の提出を義務付け、学生が派遣によって何をしようとするかを明確に理解させることに努めた。さらに派遣終了後は報告書の提出を義務付け、学生が派遣によって何を得たか又事前の予定との相違はどうであったかを意識させ、学習効果を上げる工夫をした。

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

本プログラムによる派遣は3年間で150件を超え、その中で国外での発表は25件でありプログラム以前の3年間の1.5倍以上になった。